

審査の結果の要旨

上野正道

本論文は、1920年代から1930年代におけるジョン・デューイの教育思想における公共性の概念の発展をリベラリズムの再構築と再概念化の視角から解明するとともに、「美的経験」の省察によって民主主義教育を支える公共性の哲学の形成過程を探究している。1980年代以降、アメリカを中心に「デューイ・ルネッサンス」とも呼ぶべき新たなデューイ研究の潮流が生まれているが、本論文は、それらの研究の成果を踏まえた日本における最新の研究成果を表現しており、特にデューイの公共哲学の基礎の一つとなった芸術思想の展開を精緻に調査し概念化した特徴を有している。

本論文は5章で構成されている。第一章「学校改革と公共性の再構成」では、1920年代において「顔の見える関係」の協同的コミュニケーションとアソシエーションを基底としてデューイの「公共性」の概念が公衆が活動するコミュニケーション空間として形成される過程が叙述されている。第二章「民主主義とコミュニティの学校改革」では、デューイが「再生リベラリズム」の「第一目標」を教育に設定した経緯が詳述され、「再生リベラリズム」と「アソシエーションイズム」を統合する「社会的行為の組織化」の様態が描かれている。第3章「公共的行為のエージェンシーと創発」では、1930年代の「ソーシャル・フロンティア」の教育思想とデューイの教育思想との比較検討が行われ、デューイにおいては「社会的行為」と「公共的行為」の「エージェンシー」としての学校像とそれを担う教師の専門家像が提示されている。第4章「美的経験の再構成としての教育」では、日常生活と芸術の接合によって芸術教育の公共性を見出すデューイの哲学的探究の特質が明らかにされている。そして第5章「美的経験と公共性の実践的架橋」においては、フィラデルフィアにおいて美術館を開設したバーンズ財団の芸術活動に対するデューイの積極的関与の全貌を解明し、デューイにおいては「美的経験」が教育の公共性の重要な成立基礎であることが検証される。

本論文は、全体をとおして、デューイにおける公共性の概念が、一方ではアソシエーションイズムによってリベラリズムの再構築の思想として展開し、もう一方では、その形成の根源が美的経験によって開かれることを明示している。本論の第4章から第5章において叙述されたデューイによる「美的経験」の哲学的探究とバーンズ財団によって支えられた芸術哲学と芸術教育の思想的発展は、独自の綿密な資料の発掘と調査にもとづくオリジナリティに富む考察を展開し、日米両国のデューイ研究に新しいパースペクティブを提供するものとして評価される。

本論文は、上記のように、デューイの教育思想における公共哲学の発展をリベラリズムの再構築を求めるアソシエーションイズムの政治思想の展開と日常生活との連続性を求める芸術思想の展開の二つの側面から照射して解明する独創的な探究をもたらしている。よって、本論文は、博士論文の水準を十分に満たすものとして評価された。